

姜曰廣から見た福王朱由崧擁立問題について

滝野 邦雄

はじめに

[崇禎十七年四月、北京の陥落を知り]、^{たま}會々（ちょうどその時）南京諸大臣 君を立てんことを議す。張愼言・呂大器・姜曰廣等 言う、「福王（朱由崧） 倫序もて當に立つべし。而れども七不可の貪・淫・酗酒・不孝・虐下・不讀書・有司に干預する有るなり、^{おも}惟うに潞王（朱常淞）は賢明なれば當に立つべし」と。牒（官文書）を[史]可法に移す。[史]可法も亦た以て然りと爲す。鳳陽總兵の馬士英 潜かに阮大鍼と定計し、將に福王を立てんとす。書を以て[史]可法に^と咨う。[史]可法 即ち七不可の説を以て告ぐ。而して身ずから南京に還る。[馬]士英 已に黃得功・劉良佐・劉澤清・高傑と兵を發して福王を送りて儀眞に至る。[史]可法 乃ち諸大臣と具啟（上奏文を整える）して奉迎す・・・『横雲山人明史列傳藁』列傳第一百四十九・「史可法」条・二葉）。

崇禎十七年四月に南京の大臣たちが新君主の擁立を議論した。張愼言・呂大器・姜曰廣などは、「福王朱由崧は、継承順位からすると擁立すべきである。しかし、擁立するのに問題のある七不可の「貪・淫・酗酒・不孝・虐下・不讀書・有司に干預する」がある。考えてみると潞王朱常淞は賢明であるので、擁立すべきである」と言った。そして、牒（官文書）を史可法に送った。史可法もそれに同意した。鳳陽總兵の馬士英はひそかに阮大鍼と計略をめぐらし、福王朱由崧を擁立しようとした。そこで書簡を送って問い訊ねた。史可法は、福王朱由崧の「七不可」の問題点をもって返事した。そして、[勤王軍を率いて江北にいたが]、南京に帰っていった。馬士英は、その時にはすでに黃得功・劉良佐・劉澤清・高傑の藩將と軍勢を出して福王朱由崧を儀眞に送り届けてきた。史可法は、そこで大臣たちと上奏文を整えて迎えに出た、という。

このように福王朱由崧は、皇位継承順位からすると問題はないものの、その資質に疑問があるので、潞王朱常淞を擁立すべきだと張愼言・呂大器・姜曰廣などが考え、史可法もそれに同意していた。ところが、馬士英は藩將の黃得功・劉良佐・劉澤清・高傑と結んで、武力で威嚇し福王朱由崧を擁立したというのが、『横雲山人明史列傳藁』などの諸書が伝える福王朱由崧擁立の状況である。

ところが、全祖望は「異聞」として、つぎのように述べている。

・・・赧王（福王弘光帝）の立つや、世 謂う「史閣部（史可法）の異議（異なった意見）を持する所以の者は、呂大器・錢謙益に出づ」と。而れども遜菴^①の「行狀（劉忠正公行實）」と忠正（劉宗周）の子の伯繩（劉洵，字は伯繩） 作る所の「年譜」に、則ち謂う

「馬士英 先ず異議を持し、其の後に中變（中で変更する）し、遂に之を史公（史可法）に嫁す」と。此れ異聞なり。當に更に之を攷うべし・・・（『鮎埼亭集外編』卷三十・題跋四・「題惲氏劉忠正公（劉宗周）行實後」・一葉）。

①惲日初、字は仲升、号は遜庵。康熙十七年（一六七八）に七十八歳で亡くなる。崇禎癸酉科（崇禎六年：一六三三年）の副榜貢生：劉宗周と師弟関係にあった。

②惲日初の「行狀（劉忠正公行實）」は、『遜庵先生文藁』（民國元年（壬子）・惲氏宗祠刻本）や『惲遜庵先生遺集』（道光戊子雲蔭堂刻本・族女孫惲珠重刻）には見当たらない。

赧王（福王弘光帝）が即位すると、世間で「史閣部（史可法）が、〔福王弘光帝即位に〕異議をさしはさんだのは、呂大器・錢謙益〔の考え〕から出ている」と言った。しかし、遜庵（惲日初）の「〔劉宗周〕行狀」と劉宗周の子の伯繩（劉洵）が作成した「年譜」には、「馬士英が最初に〔福王弘光帝即位に〕異議を持ち出し、その後に態度を改め、とうとう異議をとなえたことを史公（史可法）に転嫁した」と言っている。これは、人の聞かない話である。さらに調べてみるべきであろう、という。

ここで言及される劉洵の『戢山劉子年譜』は、つぎのようにいう。

是れより先、南都 變を聞き、大臣 迎立する王の世次（世代の排行）を議し、詢謀（相談する）し僉みな福藩に屬ゆだねんとす。中樞の史可法 之を主とし、鳳督の馬士英に關白（通知）す。〔馬〕士英 異議を持し、親しむ所をして〔史〕可法に不可の狀（理由）を具言（伝える）するを爲す。〔史〕可法 福藩の素より令聞（すぐれた名声）無きを念い、其の説を然りとし、潞王（朱常滂）を立てんと欲す。諸僚（同僚）も之に贊する者多し。遂に書を以て〔馬〕士英に報ず。〔ところが〕書至るに及び、〔馬〕士英の〔福藩を〕擁立するの策 已に定まり、福藩 立つ。〔史〕可法 内閣に進み、仍お樞事を管す。〔馬〕士英 閣の銜を加えられ、督師鳳陽は故の如し。〔そのため、馬士英は〕内 平らかなる能わず、拜表（上奏章）して朝するを請い、〔史〕可法の書を以て入りて告ぐるを宣言す。〔史〕可法 懼れ、〔馬〕士英を舉げて自から代らんとす。福藩 之を許す・・・（劉洵『戢山劉子年譜』下卷・年譜下・「崇禎十七年、皇清順治元年甲申。先生六十七歳」条）。

留都南京では、北京の陥落を聞き、大臣たちは擁立する王の排行を議論し、相談して皆で福王朱由崧にゆだねようとした。兵部尚書の史可法がこれを主張し、鳳陽總督の馬士英に通知した。ところが馬士英は異議を抱いて、腹心の者を派遣して史可法に福王朱由崧を不可とする理由を伝えてきた。史可法も福王朱由崧がもともとそんなに名声がないことを思い、馬士英の説明のとおりだとして、潞王朱常滂を擁立しようとした。史可法の同僚たちも多くはこれに賛成した。そして書簡を馬士英に送った。ところが書簡が届くと、馬士英主導による福王朱由崧を擁立する計画がすでに決まっていて、福王朱由崧が擁立された。新政権が成立すると、史可法は内閣學士に任命され、もとの兵部尚書の仕事も担当した。馬士英は内閣學士のポストを加えられたものの鳳陽總督の任務はもとのままであった。そのため、馬士英は気持ちが治まらず、上

奏して拝謁を願い出て、史可法が潞王朱常淂擁立に賛同した書簡について申し上げると言いふらした。史可法は恐れて、馬士英を推薦して、自分から地位の変更を申し出て、福王朱由崧（即位して弘光帝）はそれを認めた、という。

もともと留都南京の大臣たちは、福王朱由崧の擁立を考えており、それを馬士英に通知した。馬士英は、それを否定して、潞王朱常淂の擁立を主張し、史可法や大臣たちも同意した。ところが、その同意の書簡が届くと、馬士英は前言を翻して、福王朱由崧を擁立した、というのである。

この異聞と少し異なるが、『過江七事』もこうした異聞を詳しく伝える。特にこの書物は、福王弘光帝政権の実力者の馬士英と対立した高官である姜曰廣の立場から述べられたものであり、馬士英に対する見方はかなり辛辣である。また、史可法についてもこれまでと異なる別の姿を伝えている。

この『過江七事』を検討することで、姜曰廣の立場からの福王朱由崧擁立について、これまでとは異なる観点が得られるのではないかと思う。そのために拙稿では、『過江七事』の「計迎立」条が伝える福王朱由崧擁立問題を考えてみたい。

なお、『過江七事』は、『痛史』（第一種・商務印書館・辛亥十月刊）と『中國内亂外禍歴史叢書』（民國三十五年上海神州國光社鉛印本）とに収められている。著者として陳貞慧（字は定生、号は秋園・定道人・雪岑庵。江蘇宜興の人。明・萬曆三十二年（一六〇四）～清・順治十二年（一六五五）。崇禎三年（一六三〇）の副榜）の名前が冠せられている。この書物が、福王弘光帝政権下で姜曰廣を中心とした記録であることからすると、姜曰廣の発言を陳貞慧が記録した書物ではないかと推測できる。偽書の可能性もあるが、他の史料などが伝える細かな事実と符合する箇所が多く、偽書の可能性は低いのではないかと考える。ただし、姜曰廣の立場を前面に押し出した記録である。

著者の陳貞慧と姜曰廣との関係は、

時に大宗伯（禮部尚書）は姜公曰廣爲り。姜公は先世（前代）の門下の士なり（陳貞慧『書事七則』一卷・「書甲申南中事」条・三葉）。

と陳貞慧自身が記すように、父親の陳于廷（字は孟諤。江蘇宜興の人。萬曆二十三年乙未科（一五九五）三甲六十七名の進士）の門下生であったようだ。

ちなみに、陳于廷の経歴から考えてみると、萬曆四十三年七月二十二日（西暦：一六一五年八月十六日）に陳于廷は江西の巡按御史に任命されている。また、姜曰廣は、萬曆四十三年に舉人に、萬曆四十七年に進士となっており、陳于廷が江西巡按御史であった時期に、姜曰廣と関わりがあったのでは、と推測できる。

なお、紙幅の関係から姜曰廣や関連する人たちの経歴などは、別稿で改めて検討したい。

『過江七事』

①史可法の出発

闖賊の變は、邸報 斷絶し、民間 頗る流傳有り。中外 大いに震う。金陵の羣^{おおく}の亡頼（ならず者）は、饑軍を挟みて、思逞の洵なること甚だし。勳紳（勳臣）・富室「重足（非常に恐れる）して立つ」（『史記』始皇帝本紀・汲黯列傳）。大司馬（兵部尚書）の史可法 將に勤王の行い有らんとす。諸々の言路（言官） 宮詹（翰林院掌院詹事兼侍讀學士）の[姜] 曰廣^{たの}に屬^{とど}みて之を止め、且に根本の地（南京）を内顧（近くを見る）せしめんとす。[姜] 曰廣 力めて之を折（なじり非難する）し、懲^{おこ}湧（勧める）して厳しく守禦（防禦）を計るを趣すも、[史可法は] 即ち發^①す（『過江七事』 不分卷・「計迎立」条）。

①『國榷』（卷一百一・「崇禎十七年四月二十日」条・六〇七七頁）では、四月二十日に勤王軍を率いて浦口に駐屯したという。『棗林雜俎』（仁集・逸典・「定策本末」条）では、「二十二日」とする。『明季南略』（卷之一・「南京諸臣議立福藩」条）も、「[四月] 廿二日乙卯、[史] 可法 兵を浦口に治む」という。

闖賊の變では、北京からの邸報が途絶えてしまい、人々の間ではきわめて多くの話が広まった。留都南京の内外はたいそう驚き懼れた。南京の多くの無頼^{やか}の羣は、飢えた軍隊に抱って存外の思いを抱くことがひどかった。勳臣や資産家は非常に恐れた。ところが、大司馬（兵部尚書）の史可法は、勤王の軍を興そうとした。諸々の都察院の官員は、翰林院掌院詹事兼侍讀學士の姜曰廣に頼み込んでこの勤王の挙を止めさせるようにし、目の前の「根本の地」である南京を顧みるようにさせた。姜曰廣は、つとめて勤王の軍を起こすことの間違いを指摘し、しっかりと防禦の対策を計るようにと勧めたものの、史可法は、[四月二十二日に] 勤王の軍をつれて出発してしまった、という。

李自成の叛乱で北京からの情報が途絶して、南京は混乱する。そうした状況のなか、兵部尚書の史可法は、勤王軍を引き連れて出発しようとした。給事中と御史の依頼を受けて姜曰廣は、それをやめさせようとするが、史可法は出発してしまう。

そもそも史可法が任命されていた南京兵部尚書は、參贊機務を兼ね、南京六部の中で最も責任のある役職であった。

南京兵部、本部の尚書は成化二十三年（一四八七）に始めて奉けたる敕諭もて參贊機務とし、内外守備官と軍馬を操練し、人民を撫卹し、盜賊を禁戢し、庶務を振擧す。故に其の職 五部に視^{くら}べて特に重しと爲す、云^{しか}いう（萬曆『大明會典』 卷之一百五十八・兵部四十一・「南京兵部」^①）。

①『明史』には、

兵部尚書參贊機務一人……按ずるに參贊機務は宣德八年（一四三三）の黃福より始まり、成化二十三年（一四八七）に始めて奉^うけたる敕諭もて専ら本部（兵部）の尚書を以て參贊機務とし、内外守備官

と軍馬を操練し、人民を撫卹し、盜賊を禁戢し、庶務を振擧す。故に其の職 五部に視^{くら}べて特に重しと爲す、云^{しか}いう（『明史』卷七十五・志第五十一・職官四）。

とある。

北京の情勢がはっきりしない時期に、勳臣の南京守備・内官の南京守備太監と並ぶ文官のトップが、制止を振り切り、勤王軍を率いて南京を出発したのである。

なお、史可法が勤王軍をつれて出発した日時であるが、談遷の『國榷』では、
〔崇禎十七年四月〕丁丑（二十日）・・・南京 變を聞き、兵部尙書史可法 前將三千騎もて勤王せんとし、出でて江浦に屯す（『國榷』卷一百一・「崇禎十七年四月二十日」条・六〇七七頁）。

として、四月二十日に掛けている。しかし、同じ談遷の『棗林雜俎』では、

〔崇禎十七年四月〕二十二日、史尙書（史可法） 三千騎を以て勤王せんとし江を渡る・・・（『棗林雜俎』仁集・逸典・「定策本末」）。

と記し、二十二日に掛ける。

さらに、『明季南略』・『明季甲乙彙編』・『明季甲乙兩年彙畧』・『甲乙事案』も、

〔崇禎十七年四月〕廿二日己卯、〔史〕可法 兵を浦口に治む（『明季南略』卷之一・「南京諸臣議立福藩」条：『甲乙事案』卷上は同じ。『明季甲乙彙編』卷之一・『明季甲乙兩年彙畧』卷之一是、〔己卯（二十二日）、南兵尙書史可法、治兵于浦口〕に作る）。

とあり、二十二日に掛けている。

こうして出発した史可法は、そのまま南京の対岸の江浦に滞在する。『國榷』には、四月二十五日には、北からの報告が正確であったので、史可法は南京の対岸の江浦に諸臣を呼んで会議しようとしたができなかった、という。

〔崇禎十七年四月壬午（二十五日）〕北の信報 確たり。史可法 南京諸大臣に出るを約して議せんとするも、果たさず（『國榷』卷一百一・「崇禎十七年四月壬午（二十五日）」条・六〇七八頁）。

『棗林雜俎』には、もう少し詳しく、二十五日に史可法は諸臣を江浦に招いて事態を議論しようとした。この時、北京の情報が分かり、諸臣は行くことができなかった。呂大器は、史可法の書簡を得て、すぐに官員たちに伝達した。南京都察院左都御史の役所にいた談遷は、それを実際に見た、という。

越えて三日（二十五日）、史尙書（史可法） 諸臣を速^{まね}きて江浦に往かしめ事を議せんとす。時に漸く國變を知り、〔諸臣は〕往くを果たさず。呂侍郎（呂大器） 史（史可法）の手札を得て、立どころに諸公に傳示（伝達告知）す。〔談〕遷 總憲（都察院左都御史）の署中に寓すれば、之を獲目す。（『棗林雜俎』仁集・逸典・「定策本末」）。

さらに、『明季甲乙兩年彙畧』によれば、

〔崇禎十七年四月〕癸未（二十六日）・・・史可法 江上より未だ歸らず（『明季甲乙兩年

彙畧』卷之一・「崇禎十七年四月癸未（二十六日）」条／『明季甲乙彙編』卷之一も同じ）。とあり、史可法は二十六日の段階でも南京にもどってこなかった。

また、『祁忠敏公日記』の「崇禎十七年四月二十八日」条には、つぎのように記す。

……南都 念（二十）一二日に于いて已に北都の變を知る。九卿・科道及び内外守備連日會議し、廿七に於いて陵（孝陵）に謁し議を定めて福藩を迎う。是の日、之を太廟に告げ、^み僉な 花押す。而して大司馬の史道隣（史可法）先の廿六日に于いて具啓（上奏文を整えて）して迎う……（『祁忠敏公日記』甲申日曆・「崇禎十七年四月二十八日」条・十六葉～十七葉：民國二十六年（一九三七）紹興縣修志委員會校刊本）。

留都南京では、二十一日・二日にすでに北京に事件を知った。九卿（六部・都察院・通政司・大理寺）・科道（六科給事中・都察院各道監察御史）・内守備・外守備が連日會議し、二十七日に孝陵に拝謁して、議論を取り決めて福藩（福王朱由崧）を迎えることにした。この日（二十八日）、このことを太廟（祖廟）に報告し、全員花押した。そして大司馬（兵部尚書）の史道隣（史可法）は、先の二十六日に上奏文を整えて福王朱由崧を迎えに行った、という。

前後関係がはっきり記されていないので、理解しにくいだが、史可法は二十二日（二十日？）に留都南京を出て行き、そのまま長江対岸の浦口に留まっていた。留都南京では二十七日に福王朱由崧の擁立が確定する。それに先立つ二十六日に、長江対岸に滞在し続けていた史可法が留都南京に向かっている福王朱由崧を出迎えに行ったのではないだろうか。

すると、史可法は二十二日（二十日？）に留都南京を出てしまい、新帝擁立の議論が南京で行われた時には、その議論に加わらなかった。福王朱由崧の擁立が決定すると、福王朱由崧を迎えに行き、ともに留都南京に戻ってきたと考えられる。

以下で検討するが、姜曰廣の伝えたとおりだとすると、史可法は新帝擁立に積極的に関わろうとせず、馬士英の意見にしたがっていたようだ。

②南京の状況と北京情勢

越日（翌日）、集議し、部 兵を各門に分ち、仍お巡城御史に責成（責任を持たせる）し督察さす。而して郭維經（字は六脩、號は雲機。江西龍泉の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲一百十二名の進士）は則ち中城行柵（中城巡視：中城を巡視する）^①す。〔郭〕維經の金陵の官たること久しく、素より民を得るの故を以てなり^②。其の護陵・防江は、則ち守備太監^③の韓贊周、同じく魏國公の徐弘基・誠意伯の劉孔昭 皆な加毖（職務を慎む）す。韓璫（韓贊周）復た諸璫を布し、特に門禁（禁門の防衛）を嚴にす。卒騎五千を蒐選し、銳司徒（精銳の兵を指揮する官）に屬みて擐甲（甲を身につける）^④秣馬（飼馬）を盡くし、而して飭壘（軍營を整える）して中地に居りて陣せしむ。士を厲して、奮□□、不測（不測の事態）を防がしむるなり。粵東（廣東）の解餉（送り届けてきた銀糧）金 適たま至

る。計部（戸部）尚書の高弘圖 立どころに取りて以て饑軍に給す。軍も亦た戢（騒動を収める）す。是に於いて奸人 憚りて敢えて動かず。久之（久しくして）、魏國〔公の徐弘基〕 卿貳（次官）・言路（言官）を約（招く）して其の家に集め、密室に招き入れ、「邊邊（前線からの報告） 焉に在り。先帝（崇禎帝） 果して鼎成（皇帝が亡くなる）するなり」とす。乃ち咸な大いに痛み、北拜して稽顙（大いに悼む）す。而して號哭し盡哀し、拭淚（涙を流す）して出ず。冠服は姑く常の如しと約し、禁（戒める）じて訛言する者は、殺して赦す^な亡しとす（『過江七事』不分卷・「計迎立」条）。

①「南都公檄」（『明季南略』巻一所収）によると、郭維經は、四月一日の時には、「南京河南道御史」であった。

②『國榷』に「……御史の郭維經 中城を巡（巡視）し、勤敏（勤勉で機転がきく）にして有聲（名高い）たり。應天府丞（應天府知府）に進むも、驟かに其の代りを〔見出すのは〕難し。故に暫く原治（もともと役所）を兼ねしむ」（『國榷』一百一・「五月辛丑（十四日）」条・六〇九八頁）。

③南京守備は公・侯・伯の専缺で、協同守備はその次官で公・侯・伯または都督をもって充ててになっていた。南京守備は、南京軍事の最高指揮官で、勳臣のポストとして最も重要なものであった。内官の守備太監と勳臣の南京守備、そして文臣で參贊機務を兼ねる兵部尚書の三者は、表面上は鼎立しているようであるが、内官の守備太監が最も重んぜられたようである。

④『春秋左氏傳』成公二年に「銳司徒免乎（銳司徒 免れたるか）」とあり、杜預注に「銳司徒、主銳兵官也（銳司徒は、銳兵を主る官なり）」。

翌日（四月二十三日か）、官員たちは集まって、南京兵部は兵士を各部門に分けて、巡城御史に責任をもって監督させた。そして、郭維經に中城（南京城内）を巡視させた。そもそも郭維經は南京で職務を久しく担い、以前から人々の信頼を得ていたからである。太祖洪武帝の孝陵の保護と長江防衛の任務は、南京守備太監の韓贊周と魏國公の徐弘基（崇禎十四年から南京守備）・誠意伯の劉孔昭（崇禎十一年から提督操江）に慎んで執り行なうようにしてもらった。南京守備太監の韓贊周は、配下の内官を配置して、特に禁門の防衛を厳格にさせた。軍卒や騎馬五千を閱兵選拔し、精銳の士卒を率いる者に依頼して、甲を身につけ秣馬をしっかりとさせ、そして、軍營の周りを整備して、その中央に居らせて陣させ、士卒を励まして、不測の事態を防がせた。廣東から送り届けてきた銀糧がたまたま到着した。戸部尚書の高弘圖はすぐにそれを取って饑軍に給付した。それで軍營も騒動が収まった。こうして奸人も憚って行動を起こすことはなかった。しばらくして魏國公の徐弘基は卿貳（次官）や言路（言官）を招いてその邸宅に集め、密室に導き、「前線からの報告がここにある。先帝（崇禎帝）はやはりお亡くなりになった」とした。皆は大いに悼み、北に向かって謹んで拝礼した。そして嘆き悲しみ悼んで涙を流して、出てきた。ただ官服はしばらく普段通りにし、戒めて、デマを流す者は、殺して赦すことがないとした、という。

南京留都の官員たちは、軍や守備太監・南京守備の高官に頼んで、留都南京の治安の維持に

努力する。そうこうして、魏國公の徐弘基が次官や六科給事中・都察院の十三道監察御史たちを自宅に招き、先帝（崇禎帝）はやはり亡くなっていたという北京からの情勢を伝える。

③擁立の議論

是れより先、諸臣 耳語（ひそひそとささやく）して亦た微かに迎立の事に及ぶ。^み僉な主兵する者（兵を主る：兵部尚書の史可法）に推屬（推薦して委託する）す。江の南北の諸紳は則ち羣起して潞王（朱常滂）を擁す。[姜] 曰廣 曰く、「神宗皇帝の聖子神孫（皇帝の子孫） 濟濟として具在するなり。四十八載の深仁あり。何ぞ〔神宗萬曆帝の子孫を擁立するという〕天下〔の取り決め〕に負きて、輕がろしく其の座を持（主張する）して、別に圖功（功績を立てることをたくらむ）に與^{あず}からんや。天下 起きて其の後を議する者有るを恐る」と。[史] 可法 聞きて之を是として曰く、「此の兵端（擁立についての議論）なるや、惟だ分（名分） 定まれば、以て之を已^やむ可し」と。[説くは獲免に在り] 疑うらくは訛脱有り [姜] 曰廣 曰く、「然りと雖も、今日の事 守（防衛）は猶お創のごときなり。輔（補佐）す可きは則ち之を輔す。[□は實に復（『痛史』本作「福」）に在り]。子 其れ之を圖れ」と。[史] 可法 曰く、「齊の桓〔公〕の伯（覇）を以てするや、管仲を聽けば則ち治まり、易牙・開方を聽けば則ち亂る。今、吾が輩の立つる所の者は、豈に其れ惟だに是の「聽」のみならず。^{しか}而れども又た何ぞ患えんや」と。潞〔王〕（朱常滂）を擁する者之を聞き、大いに譁し。以て諸紳に^{はか}詢り、又た頗る福王（朱由崧）に於いて惡（誹謗中傷）を推す。^{ママ}司法（史可法：『痛史』本作「可法」） 是に於いて引避（逃げ出す）して言わず。江干（長江の岸）の餞に、[高] 弘圖 私に[姜] 曰廣に謂いて曰く、「渠（史可法）^{かれ} 卽ち他人の爲^{ため}に言わざれば、亦た公（姜曰廣）の爲^{ため}にも言わざる可し」と。[姜] 曰廣 叩（叩頭）することの急に於て乃ち曰く、「福・桂の兩題なるや、前に鳳督（鳳陽總督）と之を商す。[鳳督とは、馬士英なり]。[馬] 士英に晤い圖計（計略をめぐらす）するに及び、親を以てし、賢を以てするも、惟だ桂〔王〕のみ乃ち可なりとす」と（『過江七事』不分卷・「計迎立」条）。

史可法が勤王軍を率いて出発する前から、南京の官員たちもまたひそひそささやき合って、ひそかに君主をお迎えすることに及んだ。南京の官員たちはみな、推薦して主兵する者（兵部尚書の史可法）に事をゆだねた。長江一帯の郷紳たちは、一斉に立ち上がって潞王（朱常滂）を擁した。それに対して、姜曰廣は、「神宗皇帝のご子孫が生い茂るように多くいらっしゃる。また神宗萬曆帝の四十八年間の治世のたいへんな仁愛を受けてきました。それなのにどうして神宗萬曆帝の子孫を擁立するという天下の取り決めにもそむいて、輕々しくその地位〔をどうこうすること〕を主張して、別に功績を立てるたくらみにあずかろうというのでしょうか。天下の人々が立ち上がって、皇帝陛下の後継者を議論する者たちが出ることを恐れるばかりです」と

いう。史可法は、それを聞いてよしとし、「此の兵端（擁立についての論争）というものは、分（名分）が定まれば、それで取り治めることができるものです」という「史可法がこのように述べたのは、やっかいなことから逃れるためであった」。姜曰廣は、「そうですが、今の事態では、南方を防衛することは新たに作り出すようなものです。補佐できれば補佐する。[これは実際に福王（朱由崧）のことを指して言っている]。どうかそのことを熟考してもらえないでしょうか」という。史可法が、「齊の桓公の覇業を例として考えると、管仲に「聴き従う（聴）」ならば治まり、易牙・開方に「聴き従う（聴）」ならば乱れました。いま、私たちの擁立する方は、ただ「我々の言うことを」「聴（聴き従う）」ことをされなくても（我々の考えに合わなくても）、何を心配することがあるでしょうか」という。潞王（朱常淞）を擁立しようとする者たちは、これを聞いて激昂し騒ぎ立て、[潞王擁立派の]郷紳たちに相談し、またたいそう福王（朱由崧）の誹謗中傷を押し広めた。史可法は、そこで逃げて発言しなくなった。史可法が長江の河岸に勤王軍を率いて行く餞をする時に、高弘圖はこっそりと姜曰廣に、「渠（史可法）はつまり（即）他人のために言っているのではなくても、また公（姜曰廣）のために言うはずです（姜曰廣を救けるため、姜曰廣の立場から発言している）」と告げる。姜曰廣はいそいで叩頭して、「福王（朱由崧）と桂王との[擁立]問題ですが、前に鳳陽總督と議論しました。[鳳督（鳳陽總督）とは、馬士英のことである]。この馬士英に会い「議論が擁立のことを」図るに及ぶと、[馬士英は]、親疎関係をもってしても、能力からしても、ただ桂王のみがよいとしました」と言った、というのである。

史可法が勤王軍を率いて出発する前から、南京の官員たちは、新帝のことを密かにささやき合った。そして、南京の文官の最高位にいた兵部尚書の史可法に一任した。ところが、長江一帯の郷紳たちが、潞王（朱常淞）の擁立を言い出したので、姜曰廣がそれを押しとどめた。姜曰廣からすると、どうも史可法は、潞王（朱常淞）の擁立を望む人たちからの批判が大きくなったために、責任逃れしようとしたように見えた。そして、姜曰廣はすでに鳳陽總督の馬士英と相談して、桂王擁立を主張したという。ここで姜曰廣が「福・桂の兩題なるや、前に鳳督（鳳陽總督）と之を商す」と言っている事実関係については、いまのところよくわからない。

さて、これまで新帝の擁立について、「福王朱由崧」と「潞王朱常淞」とが候補者として議論されたと伝えられることが多かった。そして桂王については、たとえば『明季南略』に「時に惠王・桂王は、道 遠く至り難し」（『明季南略』卷之一・「南京諸臣議立福藩」条）とあるように、遠隔地に避難しているために、候補者からは除外されたと考えられていた。ところが、ここでは「桂王」が候補者として挙げられている。それはなぜなのだろうか。

そもそも、神宗萬曆帝には、八人の男子がいた。長子の朱常洛が帝位を継いだほか、無事に成長して王に封ぜられたのは鄭貴妃の生んだ福王朱常洵（三子）、周端妃の生んだ瑞王朱常浩（五子）、李貴妃の生んだ惠王朱常潤（六子）・桂王朱常瀛（七子）の四人である。

崇禎帝が亡くなりその三人の皇子の所在が不明であったこの時期、神宗萬曆帝の直系の孫の

世代の皇子としては、福王朱常洵（萬曆帝の三子）の子の朱由崧（福王弘光帝）と桂王朱常瀛（萬曆帝の七子）の第三子の朱由榑と第四子の朱由榔（永明王：後の永曆帝）がいた（桂王朱常瀛の長子と次子とは崇禎十五年に衡州が陥落した時に殺害される）。瑞王朱常浩（萬曆帝の五子）と惠王朱常潤（萬曆帝の六子）に皇子はいなかったようだ。

したがって、ここで桂王（子供の第三子の朱由榑と第四子の朱由榔のことを含めて述べているかもしれないが）の名前が取りざたされるのは、地理的な状況を度外視すると、別に不自然なことではないと思われる。

それに加えて、福王朱由崧は二月上旬に避難先の河南懷慶が陥落し、母后と行き別れになり出奔する。三月六日になって周王・潞王・崇王とともに江蘇淮安に現れるが、所在がそれまで不明であったようだ。

④馬士英の方向転換

議 既に定まり、[馬]士英 自ら以て功と爲さんと欲す。即ち諸臣に江浦に晤わんと約（招く）し、腹心（側近）を布（配置する）するを規る。[姜]曰廣 往かず。諸々の卿貳（次官）も亦た往かず。語は[姜]曰廣の「辨鎮將疏」^①中に詳し。往きて語（指示）を受けける者は、科臣（吏科給事中）の李沾・臺臣（河南道御史）の郭維經なり。歸りて之を布するに、鳳督[の馬士英] 定めて桂[王]を迎う、と。越日（翌日）、[史]可法 亦た手書を以て諸臣に曉すに、「桂[王]を迎うるは何ぞ。福・惠の遺議（異議が出る）有るを以てなり。乃ち舍きて桂[王]を立つるなり。其れ潞藩は、則ち古の兵馬元帥（唐代に設置された：『新唐書』百官志による）の制に倣い、暫く借りに兵馬を統べん」と。見る者 咸な唯唯（意に逆らわず従順）たり（『過江七事』不分卷・「計迎立」条）。

①いまのところ、この「辨鎮將疏」は見出せない。

桂王擁立でようやく決着して、馬士英は自分から擁立の功労者であろうとした。そこで、大官たちに長江の対岸の江浦縣で面会したいと招き、腹心の者を配置することを企てた。姜曰廣は、江浦縣に往かず、多くの次官たちもまた往かなかった。このことは、姜曰廣の「辨鎮將疏」に詳しく述べられている。往って馬士英の指示を受けたのは科臣（吏科給事中）の李沾・臺臣（河南道御史）の郭維經であった。帰ってから「鳳陽總督の馬士英は、桂王をお迎えすることにした」と布告した。翌日、史可法は手ずから書信で「桂王をお迎えするというのはどうしてなのか」というと、福王（朱由崧）・惠王に問題があるからである。そこで福王（朱由崧）・惠王を措いて、桂王を擁立する。そして潞王（朱常淓）は、古の唐朝の兵馬元帥の制に倣い、暫定的に兵馬（軍隊）を統率してもらいたい」と諭した。書信を見たものは、皆な唯々諾々として逆らわなかった、という。

「議 既に定まり」とあるのは、何日なのか断定できない。ただし、「越日（翌日）、[史]可

法 亦た手書を以て諸臣に曉^{さと}す」とあることからすると、勤王軍を率いて南京を出発した二十二日以降の事だと推測できる。

ひとまず桂王を擁立することを考えた馬士英は、官員たちを南京の対岸の江浦に招こうとしたが、多くの官員は行かなかった。ただその意向に従ったのは吏科給事中の李沾と河南道御史の郭維經であった。勤王軍を率いて出発した史可法も書簡をよこして、桂王擁立に賛同した。

この後、李沾は馬士英と行動をとる。そして、福王弘光帝政権が崩壊すると、清政権に投降し、その官僚となる。そのため、光緒『慈谿縣志』では、つぎのように記される。

按ずるに『浙江通志』慈谿・名宦に「李沾」傳有りて「崇正（崇禎）の時に〔慈谿の〕令と爲る。穢弊（腐敗しきった弊害）を剔除（取り除く）して善政を行なう。民之を便（有益）とす。憂を以て任を去るに、士民攀轅し以て泣く」（康熙『浙江通志』卷之二十七・名宦二・寧波府・明・「李沾」条・三十六葉）と云う。攷うるに、〔李〕沾 南都に仕えて馬〔士英〕・阮〔大鍼〕に黨たり。本朝に入りて光祿少卿と爲る。既に奸黨に屬し、又た是れ貳臣たり。「通志」傳中にも亦た實蹟無し。故に之を刪る（光緒『慈谿縣志』卷二十三・名宦傳・明・三十二葉^①）。

①雍正『慈谿縣志』（卷之三・秩官表・五葉）には「李沾、松江人。進士、崇禎」と記すのみである。

康熙『浙江通志』に「李沾」傳があり、「崇禎の時に浙江慈谿縣知縣となる。腐敗しきった弊害を取り除き善政を行なった。人々はこれを有益なことだとした。服喪のため離職するにあたって、あらゆる階層の人々は車のながえにすがりつき別れを惜しみ良官を見送るという古来の礼にしたがって泣いた」とある。考えてみると、李沾は福王弘光帝の政権に仕えて、馬士英・阮大鍼の派閥に属した。清朝になって、〔投誠して〕光祿少卿に任命されている。もともと馬士英たちの奸黨に属し、清朝に仕えた貳臣である。康熙『浙江通志』にも「〔善政を行なう〕と記すが、その善政の具体的な記述がない。したがって、光緒『慈谿縣志』では、その傳を削除する、という。

⑤姜曰廣の反論

〔姜〕曰廣 筆を援りて之に答えて曰く、親・賢の兩^{ふたつ}ながら盡すは、理なり。〔だが〕事は則ち書生 敢えて與り知らず。但だ桂藩は遠く天末（極めて遠方）に在り。諸藩 淮陽に邇集（近づき集まる）す。奸人の居奇（奇貨）とし、卒に黃袍（皇帝専用の衣服）もて身に加えるの事有るを恐る。且つ太阿（権力）の輕がろしく授く、或いは假^{かり}是^{ほしいまま}に弄^{もよほ}にして眞に且^{まさ}に成らんとするに至れば、則ち是れ重ねて先恨（前からの悔い）を貽るなり。吾らが輩 他日死し、亦た何の面目ありて神宗皇帝に天上に見えんや」と。衆 之を讀み、亦た唯唯（意に逆らわない）たり（『過江七事』不分卷・「計迎立」条）。

姜曰廣は筆を取って史可法の書簡に、「親疎の別や賢不賢のふたつとも完璧にするのは、道理で

す。ですが物事は、書生のあえて関知するものではありません。ただ桂王はきわめて遠いところにおられます。諸王は淮陽に近づき集まってこられていて、奸人がそれを奇貨とし、最後には皇帝の黄袍を着せてしまうことを恐れます。そのうえ、権力を軽々しく授けてしまう、あるいは仮にも勝手なことを行なって本当にそのとおりになってしまえば、重ねてもとからの悔いを残すことになります。私たちが他日亡くなった時、何の面目があつて神宗皇帝に天上でお目にかかるのでしょうか」と答えた。皆はまたこれを読んで、唯々諾々として逆らわなかった、という。

姜曰廣は、遠方にいる「桂王」を擁立するのは、地理的にも困難であり、他の候補者が運河沿いに淮陽に近づいていることもあり、それらを擁立する者がでたならばどうしようもなくなってしまうと返事したのである。

⑥突然の方向転換

時に南中（南方）咸な主兵なる者（兵を主る者：兵部尚書の史可法）が議を定めて、已に儀郎を擬（任命しようとする）し、乗輿（天子の乗る車）・法物（帝王用の儀仗・祭祀などの器物）を戒（準備）し粵（廣東）に往かんとするを知る^①。[馬]士英の鳳[陽]に歸るに及び、則ち諸將の高杰・黃得功・劉良佐 畢集（全部が集まる）すと聞き、大いに愕き、之を^{うかが}う。乃ち守備大璫の盧九德 合盟し、亦た擁立する所有り。而して立つる所の者は福[王]（朱由崧）なるを知る。[馬]士英 勢いの成るを^{はか}るを度るや、敢えて支吾（抵抗し拒む）する無く、遂に其の前説を隠し、且つ附盟を乞う。是に於いて[馬]士英 定策（天子を擁立する）を稱す。盧璫なる者は、幼きより常に恭皇帝（福王弘光帝（朱由崧）の父の福王朱常洵）に給使（仕える）し、宮號「胎裏紅」と宮號さるる者なり。其の首に宣力（尽力）するは此れを以ての故なり。而して[史]可法 概（まったく）して未だ之を知らざるなり。復書（返信）して[馬]士英に與えて、福[王]は宜しく立つべからずと訟言（公言）し、指斥（非難）の語多し。[馬]士英 之を得、乃ち大いに喜ぶ。此れに由りて以て[史]可法を挾（脅迫）するなり。是に於いて揆席（宰相）・中樞（兵部）、惟だ其の得んと欲する所となるなり。己^マ（已）に即ち書を南中（南方）に貽りて曰く、「吾（馬士英）已に福藩を奉じ、三軍を主とす」と。[馬]士英 是れより定策 儼然（はっきりする）たり。衆 韓（韓贊周）璫の宅に集まる。是の日、是の書を見る者は、初め咸な錯愕（突然でうろたえる）す。久之（久しくして）、亦復た唯唯（意に逆らわない）たり（『過江七事』不分卷・「計迎立」条）。

①『嶺表紀年』によると、桂王は王府の湖南衡州が陥落してから、^{えつ}粵（廣東）に逃げ込んだいう。

崇禎十五年冬、流賊の張獻忠 湖南を寇し、[桂]王の國の衡州 陷（陥落）す。[桂王]は 宮眷を挈^{たず}えて粵西に走る。世子・次子^{たら} 擒えられ、衡州に殺さる。[桂]王と第三子とは先に粵に入

るを得（『嶺表紀年』巻一）。

『南疆逸史』もほぼ同じ。

〔桂王〕常瀛は、李貴妃の出なり。萬曆二十九年封ぜらる。熹宗の天啟七年に始めて衡州に就國す。衡〔州〕は江湖の表に在り。地 僻遠なり。崇禎十六年、張獻忠 衡州を陷（陷落）す。桂王 永州より粵西に入る・・・（『南疆逸史』巻三・紀略第三・「永曆帝」）。

ただ、『石匱書後集』では、^{ふつ}粵（廣東）に近接する廣西梧州に避難したという。

癸未、賊張獻忠 闖〔賊の李〕自成の逼るを懼れ、南走し遂に武昌を陷（陷落）す。・・・賊長沙・岳州より路を取りて蜀に入る。時に桂・恵の二王 并せて梧州に避難す。桂王 梧〔州〕に薨ず（『石匱書後集』巻第五・明末五王世家・「桂王世家」）。

②「胎」は陶磁器などの焼成する前の成型した素地の意味で、「紅」は寵愛をうけ信任されるという意味だとすると、「胎裏紅」は、福王弘光帝（朱由崧）の父の福王朱常洵が福王に任ぜられる以前から信任されていた人物（小さい時からのお気に入り）ということを表わしているのではないだろうか。

この時、留都南京では、皆は主兵（兵部尚書の史可法）が議論を定めて、儀郎を任命し、乗輿（天子の乗る車）・法物（帝王用の儀仗・祭祀などの器物）を準備して粵（廣東：桂王は、第三子とともに粵（廣東）に避難していた）に向かおうとしていることを知った。馬士英が鳳陽總督の任地である鳳陽に戻ると、藩將の高杰・黃得功・劉良佐が集まってきたことを知り、おおいに驚いて探らせた。そして、守備太監の盧九徳が藩將を同盟させて、擁立しようとする人物がおり、その擁立しようと考えているのが福王朱由崧であると知った。馬士英がその勢いを押し量るに、あえて抵抗できるようなものではなかった。そこで、とうとう桂王を擁立するというこれまでの主張を隠して、同盟に加わることを申し出た。こうして馬士英は、天子を擁立した功績を主張しだした。太監の盧九徳は、若い時から福王弘光帝（朱由崧）の父の福王朱常洵に仕え、宮中で「胎裏紅（小さい時からのお気に入り）」と言われる者であった（このことは確認できない。福王朱常洵が洛陽にお国入りする前に宮中で仕えていたのだろうか。崇禎年間、盧九徳は軍隊を率いて各地を転戦している）。その先頭となって福王（朱由崧）擁立に尽力したのは、そのためであった。しかし、史可法はまったくこのことを知らなかった。史可法は、馬士英に返書して、福王朱由崧は擁立すべきでないと公言し、批判することばを多く書いた。馬士英はその書簡を手に入れ、大いに喜んだ。それで史可法を脅迫したのである。こうして、宰相や南京兵部尚書（留都南京での最高の地位の役職）は、ただその望むところとなった。そして書簡を留都南京に送り、「私は福王（朱由崧）を擁立し、三軍（高杰・黃得功・劉良佐の三軍か）を掌握している」と言った。これから馬士英の擁立の功績がはっきりした。皆は太監の韓贊周の邸宅に集まった。この日、馬士英の書簡を見たものはみな突然でうろたえた。久しくしてまた唯々諾々として逆らわなかった、という。

史可法が桂王擁立の準備をしていたところ、突然馬士英が方向転換をし、福王擁立派に加わった。しかし、その事を知らない史可法は、福王朱由崧批判の書簡を書いた。馬士英はそれを利

用して、新帝擁立の主導権を取ったというのである。

ほとんどの史料が、潞王朱常淐の擁立を考えていた史可法が、福王朱由崧を批判する書簡を書いて、馬士英にそれを利用されたと伝えるのであるが、ここではもともと馬士英が桂王擁立を主張し、史可法はそれに同意し、準備しはじめたところ、馬士英が状況の変化を察知して、福王朱由崧擁立に立場を変えた。それを知らない史可法が、福王朱由崧批判の書簡を書いたという。

さらに、藩將の高杰・黃得功・劉良佐を糾合して福王朱由崧の擁立を画策したのは、太監の盧九德であり、馬士英は、その情勢を見て、福王朱由崧の擁立に態度を変えたという。

確かに『石匱書後集』・『啓禎野乘二集』には、

甲申（崇禎十七年：一六四四年）三月，先帝（崇禎帝） 升遐（皇帝が逝去する）す。〔姜〕曰廣と南京兵部尙書の史可法 立君 未だ定まらず。諸帥 太監の盧九德の指を受け、福世子を奉じて江上に至る（『石匱書後集』 卷第八・「姜曰廣」列傳／康熙十八年『啓禎野乘二集』 卷一・「姜閣學傳」）。

とあり、『明季南略』にも、

甲申年（崇禎十七年：一六四四年）三月，先帝（崇禎帝） 升遐す。公（姜曰廣）と南京兵部尙書の史可法 立君を議するも、未だ定まらず。諸帥 太監の盧九德の指を受け、福藩を奉じて江上に至る（『明季南略』 卷之十二・「姜曰廣傳」条）。

と伝える。崇禎帝が亡くなると、姜曰廣と史可法とが新帝擁立を議論したが、はっきりとできなかった。その時、太監の盧九德が藩將に命じて福王朱由崧を奉じて長江にやってきたというのである。

盧九德は、『明季北略』 卷之十一・「河南光山之敗」条によれば、

〔盧〕九德 號は雙泉，揚州の人なり。性 勤幹にして，兵機（用兵の機微）に諳練（熟練）たり。（『明季北略』 卷之十一・「河南光山之敗」条）。

とあるが、嘉慶『揚州府志』などには、いまのところ盧九德の経歴は見当たらない。崇禎七年より、崇禎帝の命令で軍勢を率いて各地で流賊と戦っていた。福王弘光帝政権では、擁立の功績によって韓贊周（崇禎十六年八月任）とともに司禮官太監に任ぜられる。後に清政権に投降し、織造府長官となる。

なお、盧九德が糾合した三人の藩將のうち、黃得功については、『啓禎野乘二集』に、

公（黃得功） 名は得功，號は虎山。遼東の人。原籍は合肥なり・・・崇禎丙子（九年）把牌中軍と爲り，太監の盧九德に従いて賊を河南に勦（討伐）す。驍勇獨絶にして屢しば戦功有り・・・（康熙十八年刻本『啓禎野乘二集』 卷一・「黃靖南傳」・三十五葉）。

とあり、もともと盧九德の軍営に属していた。

⑦姜曰廣の反対

韓（韓贊周）璫 諸臣^{まみ}に見えるも言う無し。乃ち几（小机）を前に置くを呼（言いつける）し、徐ろに布筆（筆を動かして作文する）し、簿を執りて請いて曰く、「諸公 既に遺議（異議を出す）する無ければ、北拜して押名を請う」と。衆 起きて趣^{すみ}やかに拜す。[姜]曰廣 曰く、「不可なり。夫れ天下の爲に君を立つるに、是の若くの草草（あわただしくする）なるは、令典（法令）を光昭（明らかにして輝かす）する所以に非ざるなり。是の擧なるや、高皇帝在天の靈 其れ實に之に式憑（依拠する）す。蓋^{なん}ぞ出（除去）して大號（号令）せんや。明晨（早朝）、祭告し、然る後に事を行なわん」と。衆 曰く、「諾」^①と。而して阮大鍼 [姜]曰廣の語を刺（偵探）し得て、遂に文致（粉飾）し花押を畫（署名）せざるを以て邸報に傳（掲載）す。[馬]士英 之を聞き、則ち又大いに喜び、以爲えらく「是の役なるや、吾（馬士英） 即ち自ずから以て功と爲す。碌碌（やたらと忙しい）たるを恨むのみ。幸いに[史]可法 異議の書を以て我（馬士英）に與え、今は[姜]曰廣 又た畫押せず。此の兩人なる者は、世の指す所の名人なり。又た相い善し。此れ眞に坐するに異黨を以てし、吾（馬士英）の勞苦の功高きを發明（明らかにする）す可し。乃ち[阮]大鍼等に屬^{たの}みて惡言を浸流し、以て福藩を聳動（脅かす）さすを冀う」と。福王 宮に入るに及び、[馬]士英 馳せ啓して云う、「南中に臣有りて、尙お異議を持す、と聞く。臣（馬士英） 謹んで兵五萬を勒（統率）し、江干に駐劄し、以て非常に備え、危險を志[願]す」と。是れより[馬]士英の定策の功 漸く隆高（群を抜いている）たり（『過江七事』不分卷・「計迎立」条）。

①『祁忠敏公日記』（『祁忠敏公日記』甲申日曆・「崇禎十七年四月二十八日」条・十六葉：民國二十六年（一九三七）紹興縣修志委員會校刊本）に「南都 〔崇禎十七年四月〕念（二十）一二日に于いて已に北都の變を知る。九卿・科道及び内外守備 連日會議す。廿七〔日〕に於いて陵に謁し議を定めて福藩を迎う。是の日（二十八日）、之を太廟に告げ、僉^みな 花押す」。

太監の韓贊周は、官員たちに面会したものの何も言わなかった。そして几（小机）を前に置くように命じて、おもむろに筆を動かし、名簿を取って求めて「諸公に異議がなければ、北に向かって拜して署名してもらうようお願いしたい」という。皆は起き上がってただちに拝した。姜曰廣は、「いけません。そもそも天下のために君主を立てるのに、このようにあわただしくするのは、これまでのすばらしい決まり事を輝かすやり方ではありません。この行いは、天上にいらっしゃる高皇帝（太祖洪武帝）に依拠するものです。どうして〔太祖洪武帝のことを〕無視して天子即位の号令をするのでしょうか。明朝、高皇帝（太祖洪武帝）廟にご報告し、それから事を行なおうではありませんか」という。皆は「そのとおりだ」とする。阮大鍼は、姜曰廣の発言を探知し、とうとう無いことを書き足して、姜曰廣は〔福王朱由崧擁立を認める文書に〕花押を書かなかったと邸報に掲載させた。馬士英はこれを聞いて、また大いに喜んだ。そ

れて馬士英は、「この擁立の事では、私（馬士英）だけが功績をあげることができた。ただ、やたらと忙しいことを遺憾に思うだけである。幸いにも史可法が福王擁立に異議があるとの書簡を私（馬士英）に送り、今は姜曰廣が〔福王擁立を認める文書に〕署名しなかった。このふたりは、世間が認める名人である。さらに仲がよい。これをほんとうに朋党に仕立てて、私（馬士英）の苦勞した功績が高いものであることを明らかにできる。そこで、阮大鍼などに依頼して中傷の言葉を徐々に流してもらい、それでもって福王朱由崧を脅かすことができることを願っている」と考えた。福王朱由崧が南京に入ると、馬士英は馳せ参じて「留都南京では、なお〔福王朱由崧に対して〕異議がある官員がいると聞いています。臣（馬士英）は、謹んで五萬の軍を率いて、江干（長江の岸）に駐まり、非常事態に備え、危険なところに行くことを志願いたします」と申し上げた。これから、馬士英の擁立の功績はだんだんとずば抜けて高まっていった、という。

内官の韓贊周が福王（朱由崧）擁立に同意する署名を求めたところ、姜曰廣は手続きを踏まえたうえで、署名するよう主張した。馬士英は、それを利用して姜曰廣と史可法が派閥を組んで福王（朱由崧）擁立を妨害したと触れ回ったのである。

⑧史可法の失墜

〔馬〕士英の〔史〕可法を賣りてより、〔史〕可法 勢いを失ひ、憫墨（憂いて沈黙する）するのみ。而して史〔可法〕を攻め馬〔士英〕に附す者 亦た遂に出づ。祭告（報告する）の擧に、諸臣 畢集（全員集合）するも、内官監（宮室の御用品を管理する役所。長官を太監といい、宦官を充てた）未だ成行（出発する）せず。魏國（魏國公の徐弘基）大いに言う有り。〔その徐〕弘基の言に曰く、「史君（史可法） 殺す可きなり。勤王するも功無し。何ぞ返るを以て爲さん」と。〔姜〕曰廣 憤然として曰く、「夫れ兵を握りて勤王せざるが若き者は、又た應に生くべきならんや。夫れ既に死を忍びて以て興復を圖る。而して乃爾 乃ち爾^{なんじ}は長城の俾（倚）を壊さんか。夫れ低（砥）節首公（節〔義〕に^{はげ}み公〔事〕に^{むか}い）、兵を知り「病めるに急なる」^②は、史（史可法） 眞に其の人なり。之を若何ぞ之を甘心（敬意を払う）せんや。昔、史公（史可法） 知を先帝（崇禎帝）に受く。爾曹^{なんじがやから} 天人（天子）を頂奉するも、不齊（比べものにならない）。權寄（掌握している実権） 稍や移れば、下石隨起す。此れ賈豎（商人に対する蔑称）の行なり。竊かに世臣の爲に之を差す」と。語 畢り、大いに「高祖 天に在りて（天上にあつて）實に斯の語を聞くや」と呼ぶ。時に〔姜〕曰廣 情詞（感情とことば）慷慨（たかぶる）し、鬚髯 盡く張る。勳臣 俱に面相^{うかが}を覷い言う無し（『過江七事』不分卷・「計迎立」条）。

①『漢書』卷七十六・趙尹韓張兩王傳第四十六・「王尊」傳に「砥節首公 節〔義〕に^{はげ}み公〔事〕に^{むか}う：節義を尽くして公事に立ち向かう」。

②『國語』魯語上に「賢者急病而讓夷（賢者は病めるを急にして、夷（たいらか）なるに讓る：賢者は災害にあえばそれを救うのに急にして、ほかを顧みない。そのため、みずからその任にあたる。平時には人に讓る）」。

③韓愈「柳子厚墓志銘」に「……落陷阱，不一引手救，反擠之，又下石焉者，皆是也（陷阱に落ちるも、一たび手を引いて救わず、反って之を擠して、又た石を下す者，皆な是れなり：落とし穴に落ちても、ちょっと手を引いて救おうとせず、かえって押しやり，そのうえ石を落とすもの，みなそのようなものである）」。

馬士英が史可法を裏切って売り渡してから，史可法は権勢を失い，憂いて沈黙するのみであった。そして，史可法を攻撃して，馬士英に近づく者が，またこうして出てくるようになった。高皇帝（太祖洪武帝）陵に報告の挙にあたって，諸臣はすべて集まったが，内官がまだ出発しなかった。魏國公の徐弘基は大いに言うことがあった。その言うことは，「史君（史可法）は，殺すべきである。勤王の挙を行なったのに，効果がなかった。どうして戻ってこようとするのか」というものであった。姜曰廣はかっとして，「兵部尚書として軍を管理し，勤王の挙を行なわれないような者は，生き延びるべきでしょうか。すでに死を忍んで復興を図っているのに，あなたは「外敵から守る」長城となるよりどころをぶち壊そうとするのですか。そもそも節義にはげんで公事に対処し，軍事を知りこの状況を救うことに努力してほかを顧みない人物というのは，史可法がほんとうにその人です。これにどうして敬意を払おうとしないのですか。以前，史公（史可法）は先帝（崇禎帝）の知遇を得ていました。あなた達「勳臣」は，天子さまを頭に奉っておられますが，「史可法」と比べものになりません。実権のある者が少しでも変化すれば，かえって「陷穽に落ちた人を，救おうとせず，おしやり，かえって」石を投げ込むことが次々と起こるものです。これは，利益だけを求める商売人たちのようなやり方です。ひそかに勳臣「の子孫であるみなさん」のために恥ずかしいと思います」という。言い終わると，大声で「高祖洪武帝さま，天上で実際にこの言葉をお聞きでしょうか」と叫んだ。この時，姜曰廣は気持ちも言葉もひどくたかぶり，口ひげ・あごひげともにすべて総立ちになった。勳臣たちはともに顔をうかがい何も言わなかった，という。

馬士英によって史可法が福王擁立反対派にされてしまうと，史可法を攻撃するものたちが出てくる。姜曰廣は，ひどくそれに抗議したのである。

⑨李沾の福王（朱由崧）擁護

而して「吏科」給事中の李沾^{てん}の咆哮（怒鳴り声をあげる）して忽ち（にわかに）起くるあり。衆咸な之を驚き怪しむ。[李]沾 則ち袂^{そで}を攘り，大いに「今日 尙お福王を立てざるや。[そうであるのなら] 吾（李沾） 此の掖（宮殿正門の両脇の門）に撞死せん」と呼ぶ。御史（山東道御史）の陳良弼 之を佐け，劉孔昭も亦た劍を索める状を作して曰く，

「^{みんな}大家 死せん。^{みんな}大家 死せん」と。[姜] 曰廣 呼びて之に語^つげて曰く、「爾輩は何を爲す者なるや。吾（姜曰廣）らが羣掾（多くの属官）は史公（史可法）の爲に發憤するのみ。夫の迎立の若きは、昨 已に定まれり。序 實に應ず。兵 以て之に臨めば、勢 成りて、分 定まる。其れ孰れが敢えて推遷（引き延ばす）し以て自ら戮辱（処罰されて恥辱を受ける）を^なさんや。此れ何を爲す者ならんや。甚だしいかな、其の淡（意味がない）なることや」と。旁觀する者は皆な相い視て微かに^{わら}う。出るに及び、乃ち是の日、福藩 人有りて刺候（偵察）するを知る。[李] 沾等 詞知（察知）して此れを爲すなり。是れより李沾も亦た儼然として定策（福王擁立派）たり。韓璫（韓贊周）出で、祭告の文（祭祀の祭文）を趣（催促）す。[姜] 曰廣 撰し、呂大器 書す。吏 ^{もう}白すに「文辦（道理を説き明かす）なり」と。咸な奉先殿に詣り、祭告すること常儀の如し。痛哭すること之を久しくして、乃ち起きて押名して退く。[高] 弘圖 出で、[姜] 曰廣の手を搯（軽くたたく）して曰く、「史（史可法）や、史（史可法）や、危うく之を殺さん。圖らずも忠肅（于謙）の事、再び今日に見ん」と。[呂] 大器 曰く、「[姜曰廣は] 將に死するを救うと爲す。[ところがほかの人たちは] 便ち居功を圖る。人の恥無きこと是の如し」と（『過江七事』不分卷・「計迎立」条）。

史料給事中の李沾^{てん}が怒鳴り声をあげて、突然立ち上がる事態になった。人々はこれを驚き不審に思った。李沾は腕まくりし、「いまになってもやはり福王（朱由崧）さまを擁立しようとしなのか。[そうであるのならば] 私（李沾）はこの宮殿の門に頭を打ち付けて死んでやる」とおおいに叫んだ。山東道御史の陳良弼もこれを助け、誠意伯の劉孔昭も剣を探すようなしぐさをして、「みんなで死のう、みんなで死のう」といった。姜曰廣は、大声で叫び、この人たちに、「あなた達は、何をしようとする者なののでしょうか。私（姜曰廣）のような多くの下っ端の官員は、史公（史可法）のために不満をもらっただけです。福王（朱由崧）さまの擁立のことは、昨日にすでに決定しています。[福王（朱由崧）の継承の] 順位は実際に適合しています。また軍勢が臨んでいるので、状況も出来上がり、帝位の名分も定まっています。そもそも誰があえて福王（朱由崧）さまの擁立を引き延ばして自分から処罰されて恥辱を受けるようなことを犯すのでしょうか。これで何をしようとするのでしょうか。甚だしいことです、その意味がないことは」と言った。傍で見ていた者たちは、みんなお互い見合ってわずかに笑った。出発することになり、この日に福王朱由崧の関係者が状況を探っていたことを知った。李沾などは、それを察知して、先ほどのようなことを行なったのである。この時から李沾もはっきりとした福王擁立派となった。太監の韓贊周が出てきて、祭告文（祭祀の祭文）を催促した。姜曰廣が文をつくり、呂大器が清書した。吏員たちは、「この文章は、道理を説き明かしている」と報告してきた。皆で奉先殿に往き、規定のとおり祭祀を行なった。[崇禎帝が亡くなったことを] 長く激しく悼んで、起き上がり署名して退出した。高弘圖は出てから、姜曰廣の手を軽くたたいて、「史可法や、史可法や、あやうくこれを殺そうとした。図らずも于謙（土木の変で混乱した明朝

を立て直した功臣)を処刑したことの再現を見るところでした」という。呂大器は、「貴君(姜曰廣)は処刑されようとする史可法を救いました。ところがほかの高官は、すぐに福王(朱由崧)擁立の功績にあずかろうとした。人々の無恥なのは、このようなものです」という。

姜曰廣の抗議に対して、李沾^{てん}が状況を察知してはっきりと福王(朱由崧)擁立派に立ち、史可法批判を始める。ただ、姜曰廣の抗議のおかげで、史可法を救うことができたというのである。

なお、李沾^{てん}が福王(朱由崧)擁立を激しく主張したことは、『聖安皇帝本紀』・『南渡録』・『金陵野鈔』などにも見える。

⑩福王(朱由崧)入京

亡何(ほどなく)、福王(朱由崧)の舟 至る。〔史〕可法^{これ} 焉に尾(後ろにつき従う)す。諸臣 次第(順序に従って)に入り見ゆ。通名(姓名を申し上げる) 畢り。訴えるに國難家難の頻りに仍る(頻仍:頻発する)を以てするや、哀痛 自から勝えず。諸臣 亦た泣く。旋いで監國を請う。〔福〕王(朱由崧) 曰く、「宗社の事 重し。不穀(藩王の自称)不佞にして、以て宗社を稱するに足らず。願わくは宜しき者を討^き(探し求める)すを請う。不穀(藩王の自称) 敢えて當らず」と。羣臣 伏して固く請う。〔福〕王(朱由崧) 謙讓すること再びなり。〔姜〕曰廣 曰く、「親を以てし、賢を以てするに殿下(福王)に如くは無し。但だ願わくは他日に今日の難を忘るること無きのみ」と。〔福〕王(朱由崧) 曰く、「且に言う所を曉(了解)せんとす。諸先生 既に不穀(藩王の自称)を謬り推すも、且に敢えて辭せず」と。退きて〔高〕弘圖・〔姜〕曰廣 〔史〕可法に^と詢うに、「議 何ぞ二ならん」と。〔史〕可法 「咄咄(さてさて)」と。張目吐舌(目を見開き舌を巻く)のみ。蓋し敢えて〔馬〕士英の己を賣るを斥言(直言して非難する)せざるなり(『過江七事』不分卷・「計迎立」条)。

間もなく、福王朱由崧の舟が到着した。〔諸臣に先立って迎えに行った〕史可法はその後ろについていた。諸々の官員たちが順序に従って入り拝謁した。名前の報告が終わり、国家や王家の危機がしきりに引き続き起こることを申し上げると、福王朱由崧は悲痛に耐えきれなかった。諸々の官員たちもまた泣いた。そうして福王朱由崧に監國の地位に就いてもらうようお願い出た。すると福王朱由崧は、「国家(王室と国土)のことは重要である。不穀(藩王の自称)は至らないものである。国家(王室と国土)〔の監國〕と称するには〔能力が〕足りない。適切な人を探し求めるようお願いしたい。不穀(藩王の自称)はその任ではない」という。群臣は伏して重ねてお願い出た。福王(朱由崧)も再度謙虚に辞退した。姜曰廣は、「親疎や賢不賢の別をもってすると殿下(福王(朱由崧))に及ぶ方はいらっしません。ただ後日に今の困難〔な状況〕をお忘れにならないことを願うばかりです」という。福王(朱由崧)は、「では、申し出を受諾しよ

うと思う。諸先生はすでに不穀（藩王の自称）を間違って推薦するが、あえて辞退しないでおう」という。退出して、高弘圖と姜曰廣とが史可法に「[擁立の] 提案がどうして[桂王・福王（朱由崧）の] 二つになってしまったのでしょうか」とたずねる。史可法は、「咄咄（さてさて）」といって、目を見開き、舌を巻くだけであった。おそらくははっきりと馬士英が自分を売ったことを責める発言をしたくなかったのであろう、という。

福王朱由崧が南京近郊に到着し、史可法もそれにつき従ってきた。そして官員たちが、福王朱由崧に監國の地位についてももらいたいと願う。押し問答の末に、福王朱由崧は了承する。福王朱由崧につき従って留都南京にもどってきた史可法に対して、高弘圖と姜曰廣とが擁立問題について問いたす。しかし、史可法ははっきりとは答えなかったというのである。

以上、『過江七事』が伝える姜曰廣の発言からすると、福王朱由崧擁立時の状況について、つぎのようになるのではないだろうか。

◎史可法は留都南京の文官の最高の地位にあったものの、擁立について議論がなされた時、勤王軍を率いて対岸に行き、留都南京にはいなかった。

◎潞王朱常淐の擁立を主張したのは、江南の郷紳たちであって、その勢いを恐れて、史可法は勤王軍を率いて留都南京を離れてしまった。

◎もともと馬士英は桂王の擁立を考え、史可法もそれに同意して、準備を進めていた。ところが、内官の盧九德が藩將たちをまとめて福王朱由崧の擁立を計画していることを知り、馬士英は福王朱由崧の擁立を主張するようになる。

◎馬士英の擁立の変更を知らない史可法は、福王朱由崧批判の書簡を馬士英に送る。馬士英は、その書簡を利用して、擁立の功績を独り占めする。

◎福王朱由崧擁立を決定する会議で、姜曰廣はまず高祖の廟に報告してから決めるように主張する。馬士英は、それを姜曰廣が福王朱由崧擁立に反対したとして邸報に掲載する。こうして、史可法と姜曰廣とが福王朱由崧擁立に反対したと宣伝され、不利な立場に追い込まれることになる。

おわりに

そもそも、福王弘光帝政権の出来事は、意識するにせよしないにせよ、潞王擁立派が善で福王擁立派が悪という構図があり、それに当てはめて当時の状況を解釈して伝えられてきた。この構図からすると福王朱由崧と馬士英は最初から一体で悪あり、潞王朱常淐と史可法は最初から一体で善でなければならなかった。

そこから、擁立問題については、明王朝の中興を優先した善玉の史可法たちは、優れた資質を持った潞王朱常淐を擁立しようとしたものの、悪玉の馬士英の手玉に取られて無能な福王朱

由崧を皇帝に擁立されてしまう、と理解されてきた。

ちなみに、拙稿「明末・衛輝府における潞王父子について」(『経済理論』第393号・2018年)で検討したように、実際に潞王朱常澆に「賢名」(黄宗羲『弘光實錄鈔』による)があったかについてははっきりしなかった。ただ、父親の潞王朱翊鏐(神宗萬曆帝の同母弟)は、萬曆「實錄」などによると、神宗萬曆帝から叱責されるほど放埒な人物であった。父親の福王朱常洵の根柢のはっきりしない悪評が子供の福王朱由崧と一体化しているのと異なり、潞王朱常澆には父親潞王朱翊鏐の悪評はまったく影響していないのである。これも、福王弘光帝政権に対する評価が作用しているといえないだろうか。

ところが拙稿で検討した『過江七事』は、こうした構図から逸脱した「史可法は新帝擁立に深く関わろうとせず、馬士英に翻弄された」・「太監の盧九徳が鎮將の高杰・黄得功・劉良佐を糾合して福王朱由崧の擁立を画策した」・「馬士英は、最初から福王朱由崧擁立派ではなく、盧九徳の画策を見て態度を変えた」というような事情を伝える。これらは、これまで福王朱由崧擁立について伝えられてきた理解とは異なった記録である。姜曰廣の立場からではあるが、福王朱由崧擁立時の雰囲気伝えたものであると言えるのではないだろうか。

A Background on the Enthronement of Zhu Yousong, the Prince of Fu, as the Hongguang Emperor, from Jiang Yueguang's Perspective

Kunio TAKINO

Abstract

This paper examines Jiang Yueguang's *Guo jiang qi shi* to shed light on how Zhu Yousong, the Prince of Fu, was enthroned as the Hongguang Emperor. The evidence suggests that in *Guo jiang qi shi*, Shi Kefa was not deeply involved in the enthronement of the new emperor, but rather, was swayed by Ma Shiyong, and that the eunuch Lu Jiude planned to have Zhu Yousong, the Prince of Fu, enthroned as emperor. Initially, Ma Shiyong was not a member of the group that sought Zhu Yousong's enthronement. Ma Shiyong, however, changed his position after seeing Lu Jiude's plan. These findings are significantly different from the understanding that has prevailed hitherto.